



# たたかいの記憶

新・ちくま文学の森 9

筑摩書房

たたかいの記憶 〈新・ちくま文学の森9〉

一九九五年五月二十三日 第一刷発行

編者 鶴見俊輔（つるみ・しゅんすけ）

安野光雅（あんの・みつまさ）

森毅（もり・つよし）

井上ひさし（いのうえ・ひさし）

池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 森本政彦

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊦二一

振替〇〇一六〇一八―四二二三

装本 安野光雅

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

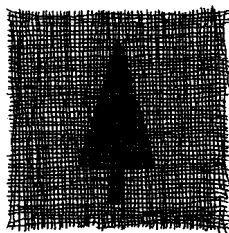
〒三三二 大宮市榎引町二一六〇四 筑摩書房サービス

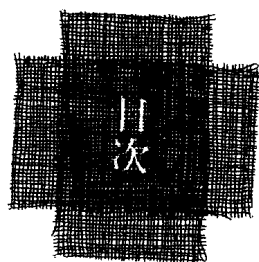
センター TEL〇四八―六五一〇〇五三

©S. TSURUMI M. ANNO T. MORI H. INOUE

O. IKEUCHI 1995 Printed in Japan

ISBN4-480-10129-2 C0393







骨のうたう …………… 竹内浩三 …… 6



鉛なまりの旅 …………… 吉野せい …… 9

張徳義 …………… 長谷川四郎 …… 31

二人の友 …………… モーパッサン 青柳瑞穂・訳 …… 61



まっふたつの子爵ししやく より …… カルヴィーノ 河島英昭・訳 …… 75

十二月のセワストーポリ …… トルストイ 工藤精一郎・訳 …… 91

鳥からすの北斗七星ほくとしちせい …… 宮沢賢治 …… 117

雀すずめ …………… 太宰治 …… 129



ランドルフ・ボーン

ドス・パソス 並河亮・訳 …… 145

戦争をやめさせる話 ……

魯迅 竹内好・訳 …… 153

軍楽 ……

中野重治 …… 173

象を撃つ ……

オーウェル 井上摩耶子・訳 …… 191



渡辺直己歌集 抄 ……

渡辺直己 …… 207



恪氣の火の玉 ……

桂文楽・演 …… 211

男色武士道 ……

池波正太郎 …… 227

南から来た男 ……

ロアルド・ダール 田村隆一・訳 …… 281

チャンピオン ..... ラードナー 加島祥造・訳 ..... 307

コロンブレ ..... ブッツァーティ 竹山博英・訳 ..... 347

▲ コシヤマイン記 ..... 鶴田知也 ..... 359

▲ 不思議な出会い ..... W・オウエン 鶴見俊輔・訳 ..... 399

戦争のかなしみ 解説にかえて ..... 鶴見俊輔 404

た  
た  
か  
い  
の  
記  
憶

竹内浩三

骨のうたう

戦死やあわれ

兵隊の死ぬるやあわれ

とおい他国で ひ・よ・んと死ぬるや

だまつて だれもないところで

ひ・よ・んと死ぬるや

ふるさとの風や

こいびとの眼めや

ひ・よ・んと消ゆるや

竹内の創始した同人誌「伊勢文学」第八号（一九四二年八月）に遺稿として載せられた作品。

国のため

大君のため

死んでしまふや

その心や

苔<sup>こひ</sup>いじらしや あわれや 兵隊<sup>へい</sup>の死ぬるや

こらえきれないさびしさや

なかず 咆<sup>ほ</sup>えず ひたすら 銃<sup>じゆう</sup>を持つ

白い箱<sup>はき</sup>にて 故国<sup>ここく</sup>をながめる

音もなく なにもない 骨

帰<sup>かへ</sup>っては きましたけれど

故国の人のよそよそしさや

自分の事務や 女のみだしなみが大切に

骨を愛する人もなし

骨は骨として 勲章<sup>くんしょう</sup>をもらい

高く崇められ ほまれは高し

なれど 骨は骨 骨は聞きたかった

絶大な愛情のひびきを 聞きたかった

それはなかった

がらがらどんな事務と常識が流れていた

骨は骨として崇められた

骨は チンチン音を立てて粉になった

ああ 戦死やあわれ

故国の風は 骨を吹きとばした

故国は発展にいそがしかった

女は 化粧にいそがしかった

なんにもないところで

骨は なんにもなしになった

なまり  
鉛の  
旅

吉野  
せい

吉野<sup>よしの</sup>せい 一八九九（明治三二）——一九七七  
（昭和五二） 福島県小名浜の生まれ。その地の  
高等小学校をおえたのち代用教員となる。  
二十二歳のとき開拓農民の詩人三野混沌（吉  
野義也）と結婚、阿武隈山麓に住んで開墾生  
活に入る。夫の死後、ペンをとり創作をはじ  
める。書きためた文章を七十五歳の時に「渙  
をたらした神」として刊行、土に生きる女の  
したたかな生命力を伝えて鮮烈な印象を与え  
た。「鉛の旅」は「渙をたらした神」の中の一  
篇。

よく似ている。太陽が両岩壁のどちらかに落ちて、深い溪谷の様相と、それとわきまえられる流水の形が昏ずんでいるどこか記憶に残る風景が思い出される。が、途轍もない、ここは古びた常磐線平駅の三番線プラットホームだというのに。寄せる波、打ち返す潮さながら満ちさしする人間のそれが、不思議と音の抜けた小波の皺そっくりだ。けだものか人か、男、女、はつきりしない裏も表もないずんべらで、ふくれたの細がれたの、しゃちこぼったの溶けそうなだらけたの、だがどれも鉛色の面型にくり抜かれた二つの目と三角形の口がはつきり一つずつえぐられてついているだけが鮮やかすぎる。

磐越線、ここは太平洋から日本海へ抜ける磐城岩代越後をまたぐ横断路線。大正の初め頃開通された時分は、どこかの線路を流れ流れて老いぼれた車体が、最後の正念場と腹をきめたように、さびた赤線の腹帯をして、しょぼくれた小さい目のような窓々を並べて、くしゃみつづけの車輪のきしめきと細い線路になじめぬ車体の揺れが不安ながらも、必死と黒い吐息をぼっぼっとまだ鮮麗な阿武隈山脈の麓の緑に吐きかけながら、しかもその座席はせまい浅い腰掛けにそそけた薄べりごさが敷いてあった。

私は今その磐越東線に乗り込んだ。車輛は何輛目かほぼ中央と思う。座席は往路に向いた

左窓寄り。苦心して伝てを求めてようやく手に入れた一枚の往復切符をお守りのように握りしめて、真暗い四時半山道を下って一里、遮光幕の中のぼんやりした未明の駅に駆けつけて、冷たい改札口のそばに立ちつくして二時間近く夜明けを待ったかいた。あのおとぎばなしに同じ記憶のポッポ汽車のまぼろしは失せて車体も広く、背当ても腰掛けもすり切れても布張りだが、なのになぜこうも固く暗く冷たいのだろう。重なうって乗り込んでくるとの客もえぐられた眼と口とをぎらぎら動かして、重い胴体をぶつけてごつごつと座席を争う。網棚が古い鶏舎の金網のように重荷で黒くたれ下がる。うなる風音だけが車内を灰色に吹き抜けるだけだ。

私の傍と向かい側には大荷物をかかえた何しようばいか知らぬ男が鉛の目で私を見据えてから腰を下ろす。彼等はからだを二つに折って両方から頭をねばりつけて何か語り合うようだが、夜の微かな木の葉ずれの音をきくようだ。さざなみはあらかた汽車に呑みこまれて、ホームはコンクリートの鈍い地肌が寒々しく広がりはじめた。その時どつと湧き立つように陸橋から駆けおりてくる一団が、私の窓のまん前に四五列の半円陣を敷いた。紛れもなく出征兵士の歓送であった。そうだ、その日は昭和二十年三月九日と私ははっきり覚えていた。これもまたこちこちの鉛の群だ。

中央に直立した出征兵は、ばね仕掛けのように右手を耳近く三角形に釘づけし、じりじりっと前後左右ににじり向いて念入りの礼をした。二三十人の取り巻いた見送り人の

雰囲気から何か固い職種らしくどこか角張って見える。背帯をつけた甲種国民服の上司らしいのが、型にはまったむずかしい激励の言葉を咆えてからしやつちこぼった握手をした。発車は迫っている。出征兵は姿勢を正すと、おそらく何百の目が窓々から自分を射すくめているであろうことを意識してか、列車に向かって肩を怒らし、その三角の口がそのまま顔半分には拡がり奇妙な赤い舌がちらちらと燃えた。破れ太鼓を叩き割るような声がふるえて来た。ぶち破って来ます。私は、私は、きつとぶち破って来ます。敵を、アメリカの奴等を――、それきり絶句した。ちらりと赤い舌が沈んで、口辺の細い溝に二条の水がたらたらと光った。糊気もないうすよごれたエプロン姿の国防婦人会のたすきだけを斜めにかけて無表情のそれでも七八人の中年の女たちが今日まで何十回振ったか知れぬさめた日の丸の小旗を形だけ振って、みんなあてももない方に眼を向け、哀調を含んだ露営の歌を口先だけでうたっていた。一同は両手を上げて高々と万歳を三唱した。汽車の窓々からも皆この兵に万歳を送った。兵士の胸に勇気をかり立て万感をそその声も、わずかの血縁を除く以外は三分後にはきれいに忘れられてしまふのだまでしかない。鉛の大口はがきと閉じられ、兵士は太股に私たちの車輻ののりこんだ。車内の風は少しざわめいたが、まるで彼のために用意されていたような私の真向かいの空席に彼は無言で腰を下ろした。私は出征兵と真向かいに顔を合わせた形になった。傍の男たちは一瞬からだを起こして頼りなげな眼をちらと向けたが、すぐまた元の姿勢にかえって二つの頭ははりついたようだ。

汽車は動き出した。兵士は肩から頭を窓外に突き出して張子の虎のように首をふりつづけた。汽車は速度を増して折れ曲り、小さいトンネルをくぐり、山が遠のいて田圃がひらけ、また山が迫って細い野道が見えて五六軒の民家が並び、子供が二人汽車を見ている。三月には似合わぬ空も山も皆暗い鉛色だ。どこもここもこちつと縮みきっている。私は地下足袋をはいて防空頭巾を肩にかけ、帯芯の天じく木綿で縫った手製のリュックを胸に当ててしっかりと抱えこんでいた。どこへ行くのかと誰かに声かけられそうに思っていたが、鉛の顔同士に記憶は伴わぬと見える。いわきのまわりから脱け出たことのない四十六歳の私が、同じ県内とはいえ遥かに遠く感ずるはじめての旅、会津若松二十九聯隊×中隊×速射砲隊×班の息子にあいにゆく母親の一人旅である。私のツトムは、断末魔の軍政府があがきにあがいてひねり出した一年繰りあげ徴兵の初の甲種合格者であった。二月一日入営の日は父親が現地まで見送って宿で一夜を枕を並べて寝た。が父だけは眠れなかった。同室の同じ見送りの父親が、小柄な自分の息子とツトムを見較べて、立派な体格でやすなあ。大方山砲隊かもとたぶんはほめ言葉でいったと思うが、五尺七寸二分、十六貫の若者は手放すに惜しい貧しい我が家の唯一の動力であった。エンジンをもがれた農具と同じ父親が複雑な思いを胸につめて、息子のぬけ殻だけを風呂敷に包んで悄然と山に持ち帰ったが。数日前、息子から検閲済の判を押されたはがきが来た。元気で訓練にはげんでいます。さつまの苗床踏みはじめたか、二十五度から八度の間の床温を守って下さい。今営舎の裏門でならちよつとの間はお目にか